2017.2.18 GEWANDHAUS 龍ヶ崎ゲヴァントハウス【オリジナルCDコンサート】

“変ロ長調の世界” ―変ロ長調の名曲を探る―

プログラム

“調性”を特集するシリーズ、今回は変ロ長調で書かれた名曲を集めてお送りします。

シューベルトのピアノ・ソナタ第21番は生涯最後のピアノ・ソナタで、亡くなる1828年9月に完成され、11月にシューベルトは亡くなりました。長大な規模と充実した内容を持った名曲です。ピアノ三重奏曲第1番も1827年1828年に作曲された晩年の作品。躍動感に満ちた溌溂とした楽想は、豊かな叙情性に溢れていて、朗々とうたわれるロマン的な美しさは素晴らしく魅力的です。このジャンルの名作のひとつです。ブラームスの「ハイドンの主題による変奏曲」は、ハイドンが古くから伝わる賛美歌“聖アントニウスの合唱”を引用した“ディヴェルティメント”の第2楽章をもとに、ブラームスが管弦楽用の変奏曲として作曲した作品で、ブラームスの巧みな技法によって、変幻する楽想の豊かさが見事な名曲です。先に作品56bとして2台のピアノのために書かれたピアノ版もよく知られています。モーツァルトのピアノ協奏曲第27番は、死の直前1791年に作曲された最後のピアノ協奏曲で、簡潔な手法で書かれながら、澄み渡る清らかな響きの美しさは格別の存在感を持っています。最後を飾るピアノ協奏曲にふさわしい傑作です。ベートーヴェンの交響曲第４番は1806年36歳の時に書かれた作品で、シューマンが第３番「英雄」と第５番「運命」の間に位置する事から、“ふたりの巨人に挟まれたギリシャの乙女“と形容したという有名な逸話が残っています。明快で気品ある美しさは幸福感に溢れていて、第３番や第５番にはない魅力を持っています。中期を代表する名曲のひとつです。ごゆっくりお楽しみください。

＊＊＊＊＊＊＊

フランツ・シューベルト（1797～1828）：
ピアノ・ソナタ第21番変ロ長調D.960～第1楽章から、第4楽章
内田光子（ピアノ）
（1995.8.29　ザルツブルク、モーツァルテウムでのLive）

ピアノ三重奏曲第1番変ロ長調D.898～第1楽章、第2～第4楽章抜粋
ウラディーミル・アシュケナージ（ピアノ）/ピンカス・ズーカーマン（ヴァイオリン）/リン・ハレル（チェロ）
（1998.12.3　横浜・みなとみらいホールでのLive）

ヨハネス・ブラームス（1833～1897）：
ハイドンの主題による変奏曲変ロ長調op.56a
カール・ベーム指揮ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団
（1972.8.30　ザルツブルク祝祭大劇場でのLive）

＊＊＊ 休 憩 ＊＊＊

ウォルフガンク・アマデウス・モーツァルト（1756～1791）：
ピアノ協奏曲第27番変ロ長調K.595～第1楽章から、第2楽章、第3楽章
マウリツィオ・ポリーニ（ピアノ）
クラウディオ・アバード指揮ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団
（1999.2.18　ベルリン・フィルハーモニーホールでのLive）

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン（1770～1827）：
交響曲第4番変ロ長調op.60～ 第1楽章から、第2楽章から、第4楽章
小澤征爾指揮ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団
（1990.1.14　ウィーン・ムジークフェラインザールでのLive）

★ホームページアドレス　http://www.bekkoame.ne.jp/~hippo/gewandhaus/